

隅
田
川
を
遡
る

橋
梁
物
語

目次

序章	隅田川を遊って	4
	橋梁の景観 大川端の歴史を繙く	
第一章	勝鬨橋と明石町界限	16
	双葉跳開型可動橋 築地魚市場 波除稲荷大祭 聖路加ガーデン	
第二章	佃大橋と佃島・中央大橋	28
	佃島の渡し 住吉神社大祭 石川島人足寄場跡 中央大橋 相生橋と越中島	
第三章	永代橋・隅田川大橋	46
	富岡八幡宮例大祭 深川の発展 木場 豊海橋	
第四章	清洲橋・新大橋	58
	小名木川河口 芭蕉庵 清澄庭園	
第五章	両国橋・総武線鉄橋	78
	明暦の大火後 江戸の賑わい 両国の花火 国技館 柳橋	
第六章	蔵前橋・厩橋・駒形橋	110
	蔵前橋の黄色 蔵前国技館 厩河岸 駒形堂	
第七章	吾妻橋・東武鉄道鉄橋	132
	浅草寺と仲見世 リバーピア吾妻橋 東武鉄道業平橋駅	
第八章	言問橋・桜橋	154
	旧水戸藩小梅邸 山谷堀 墨堤 待乳山と今戸	
第九章	白鬚橋・水神大橋・千住汐入大橋	186
	旧寺島町界限 橋場の渡し	
第十章	千住大橋と千住宿	212
	江戸入府に遡る大橋 千住宿	
付表	明治期の測量図	226
解説	橋梁の構造と形式	230
索引		234

序章

隅田川を遡って

橋梁の景観 大川端の歴史を繙く

架橋が制限されていた江戸時代には、隅田川両岸は「渡し」で結ばれていたが、人々の往来は増大の一途をたどり、架橋が始まった。当初の木橋は関東大震災で大きな被害を受けたので、すべてが鉄橋に架け替えられ、また自動車時代の到来によって、高速自動車道をはじめとして新しい橋梁が建設された。

写真は二階建ての鉄橋「首都高速6号線」





清洲橋



「リバーシティ21」と永代橋



景観を創成する橋梁

隅田川とそこに架かる橋は、江戸時代には浮世絵のテーマとして親しまれ、明治になると錦絵、小説や演劇の舞台となり、江戸、東京のシンボルともなってきた。洪水、両岸一帯の大火など数々の災害を乗り越え、隅田川両岸は整備されて、近年散歩が楽しめるテラスもできた。絶え間なく建設される高層ビル群と相俟って、それぞれが個性をもった橋梁は、東京の新しい景観美を形成しつつ、岸辺を散策する人々に安らぎを与えている。

重要文化財となった橋梁

平成十九年(2007)四月、国の文化審議会の答申に基づいて、勝鬨橋・永代橋・清洲橋は、国重要文化財指定の告示を受けた。都道府県の道路橋として初の指定である。清洲橋と永代橋は、関東大震災の復興事業の象徴として、また、勝鬨橋は、我が国で最大規模の跳開橋として、いずれも当時の最先端の技術を駆使して建設された。したがって橋梁技術史上、高い価値をもつ。清洲橋、永代橋、勝鬨橋が揃って重要文化財に指定された意義は極めて大きい。東京では、その他の橋、蔵前、厩形、駒形、吾妻、白鬚橋を平成十一年に、また両国、言問橋を平成二十年、都選定歴史的建造物として指定、保全してゆく方針を固めた。

隅田川とその橋梁の歴史を繙く

昔は「大川」、「大川端」として親しまれた・・・

江戸時代には、吾妻橋の辺りから下流は大川と呼ばれていた。今でも古典落語などでは「大川」が出てくる。また、大川右岸、特に吾妻橋から新大橋周辺までを「大川端」と称した。当時の川幅は現在よりずっと広く、元禄以降庶民のゆとりができてくると、人々は大川を猪牙舟ちよきぶね（江戸時代に市中の水路を移動するために利用した船で、形が猪の牙に似ているのが名の由来と言われている）に乗って上下するのを楽しみにした。

江戸を外から防備するという視点で、徳川時代には架橋が制限され、明治維新後も、多くの「渡し」で両岸が結ばれていた。

秀吉の小田原攻めが行われた天正十八年（1590）、家康はそれまでの居城であった駿遠地方を離れ、関東へと知行地替えを命ぜられたが、江戸を中心とする関東平野は広大で、人の手が入っていない土地だった。彼は江戸に入るとすぐ都市づくりに取り掛かり、城を中心にした城下町の形成と、治水事業、および海岸沿いの低湿地の埋め立てを行なって、現代の東京に至るまでつながる都市の骨格を作り上げた。家康は、隅田川や多摩川など、江戸市街と境界となる河川については橋を架けなかったが、一つだけの例外として、入府後四年目に

「千住大橋」を架けた。この橋は、江戸時代の二百六十年余りを通じ、奥州に対する開かれたエントランスとして重要な役割を果たし続けた。

江戸時代にはその後、四つの橋が架けられた。最初に架けられたのは「両国橋」だった。明暦三年（1657）、大火によって江戸市街は大半が焼失し、江戸城の天守閣も焼け落ちてしまった。幕府はこれを教訓として、防火を視野に入れた都市の作り直しを始め、広小路や火除け地を整備し、都心に広い土地を生み出すため、寺社や大名屋敷を郊外に移転させた。また、避難の道を確認するために隅田川に橋を架けた。両国橋ができてから、本所、深川など左岸の地域が都心と結ばれ、この地域が発展した。また、本所には旗本屋敷が、深川には寺社が大規模に移転してきた。深川の一角の「小名木川」が隅田川に注ぐあたりに、芭蕉翁が草庵を結び、そこから奥の細道を行脚する旅に立った。今も芭蕉庵の跡地が残され、芭蕉ゆかりの展望台などが建てられた。芭蕉の晩年、元禄六年（1699）には「新大橋」が架けられたが、その位置は現在の橋よりやや下流にあつて、当時大橋と呼ばれた両国橋に対して、新しくできた橋というので、新大橋と呼ばれた。

新大橋ができて五年、元禄十一年には「永代橋」が架けられた。元禄十五年の暮、討ち入りを果たした赤穂浪士は、できて間もないこの橋を渡つて、品川の泉岳寺を目指した。

永代橋は日本橋地区と深川八幡を結ぶ橋で、庶民にとつて大事な役割をもっていた。しかし、この橋にはいたましい落橋の歴史がある。文化文政時代は、庶民の文化が花開いた時期として知られているが、その頃人気の行事に、深川八幡の祭りがあつて、日本橋の町人たちは、この橋を渡つて深川の祭り見物に繰り出したが、文化四年(1807)、祭り見物に出かけた大勢の人がこの橋を渡っている最中、人の重みに耐えかねて橋が落ち、大勢の人が溺れ死ぬという大事故が起つた。

徳川時代最後の橋は「吾妻橋」で、安永三年(1774)に架けられ、当初は大川橋と呼ばれていた。この橋ができたので、向島にある墨堤の桜が庶民に一層身近になつた。

吾妻橋は、本所辺りの開発が進み、明和六年(1769)浅草花川戸の伊右衛門と下谷竜泉寺の源八というものが、幕府に橋の架設願を出し、許可されて、民費の橋が架けられた。長さ八十四間、幅三間半、行桁二十三、橋脚八十四本、工事費二、六八五両、着工後五年で完成した。橋の通行料は武家以外の全ての人から二文ずつ取つた。

本所という名称は江戸時代に入つてから用いられるようになったが、牛島神社の創建は貞観二年(860)とされ、江戸開府以前から吾妻橋の周辺には集落があつたようだ。永禄二年(1559)の「小田原衆所領役帳」には「江戸牛島四ヶ村」という記述が見られる。

万治三年(1660)には本所奉行が任命された。このときすでに本所の地名が使われたが、本所と深川の境界は豎川で、現在の墨田区と江東区との行政区画にほぼ等しい。隅田川沿いには幕府の倉庫がおかれ、その他は、旗本・家人の邸宅などとなつていた。北十間川沿いには寺町があつた。浮世絵師の葛飾北斎は宝暦十年(1760)に南割下水沿いで生まれている。



歌川広重「大はしあたけの夕立」(『名所江戸百景』)



ゴッホの模写

なデザインを主張しながら、それでいてほかの橋との間で調和を奏で、全体として都市景観のシンボルとなったからにはほかならない。隅田川の橋は、近年では災害対策連絡を主たる目途とした橋や遊歩道的な歩行者専用橋も架けられ、バリエーションが一層豊かになっている。

九つの橋のうち、両国、厩、吾妻の三橋は東京市が担当し、残りの六橋を内務省復興局が担当して建設した。復興局では外国の都市を参考にしたり、画家や作家の意見を聞いて

近代的な橋梁の建設はじまる

明治、大正時代に入ると、交通量の増加に伴って次第に木橋などで架橋が進んだが、明治二十九年(1896)、東京は大規模な水害に見舞われ、さらに同四十三年(1910)八月関東地方の各地で河川が氾濫、隅田川の堤防は決壊して下町全域が水没した。大正十二年(1923)には、関東大震災で大きな被害を受けた。そこで、損傷した橋はつぎつぎと鉄橋に架け替えられ、さらに自動車時代の幕開けと共に、より多くの橋梁の建設が行われるようになった。

震災復興の時期に架けられた橋は九つで、下流から順に、相生、永代、清洲、両国、蔵前、厩、駒形、吾妻、言問橋が架けられた。これに震災で壊れなかった新大橋を加え、隅田川十橋と称されて東京の新しい名所になったこの時期には白鬚橋と千住大橋は数に入れられていなかった。

隅田川の橋梁群がひとつの集合体として捉えられるようになったのは、それぞれの橋が多様なデザインを主張しながら、それでいてほかの橋との間で調和を奏で、全体として都市景観のシンボルとなったからにはほかならない。隅田川の橋は、近年では災害対策連絡を主たる目途とした橋や遊歩道的な歩行者専用橋も架けられ、バリエーションが一層豊かになっている。



夏になると、人々は川面を渡る涼風をもとめて隅田川に集まってくる。両国橋周辺は多勢の人で賑い、橋の上、料理屋や茶店の並ぶ川の兩岸、水面が見えなくなるほどたくさん納涼船、どこを見ても人でいっぱい。夜になると、橋をはさんで花火が打ち上げられ、さらに多くの人が集まる。花火は江戸の華、最大のイベントだった。江戸の納涼の賑わいを今に伝える歌川貞秀の「東都両国ばし夏景色」(部分)。



歌川広重の浮世絵
 左:『名所江戸百景』『両国花火』中央:『東都名所』『隅田川の渡』
 右上:『隅田川八景』『吾妻橋帰帆』右下:『東都両国遊船之図』(部分)



たりして、帝都の門たる第一橋梁として、「永代橋」は男性的で力強いデザインのアーチ橋とし、第二橋梁の「清洲橋」はライン川にかかるケルンの吊橋をモデルとして、女性的なやわらかさを感じさせるデザインを採用した。またそれまで隅田川に架かっていた橋は、どれもみなトラス橋ばかりだったので、新しく登場した多様な橋梁群を見た人々は、帝都復興の象徴のようなものを感じた。これらの橋のうち、最も早く完成したのは相生橋と永代橋で大正十五年(1926)、もつとも遅いのが両国橋の昭和七年(1932)だが、昭和十五年には跳ね橋「勝鬨橋」が完成し、千住大橋から下流の橋を総称して「隅田川十三橋」と呼ぶ言い方も現われた。

奥付

隅田川を遡る 橋梁物語

2009年12月22日 第一版発行

CREATIVE BOOK

首都圏人 第10号

編集人：NPO市民フォーラム 原 昭二

Advisory Board:

西川良治／大石 武／岡田洋介／深瀬 克／原 智子

レイアウト：芳野美穂子

空撮：勝山 昌

著者 NPO市民フォーラム

発行所：(株)ヒューマン・クリエイティブ

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-9-5

TEL: 03-3813-7937/FAX: 048-476-9111

URL: <http://shutoken.camellanel.com/>

発売：播籃社

〒192-0056 東京都八王子市追分町10-1-101

TEL: 042-620-2626/FAX: 042-620-2616

URL: <http://www.simizukobo.com/>

印刷・製本：株式会社シナノ

ISBN : 978-4-89708-287-5 C0225\1200E

Printed in Japan